自然・歴史・文化が「響き合う杜のホール」

視点①「中の瀬橋上から」- 歴史と自然が織りなす川の流れと重なる段丘の緑に調和した景観

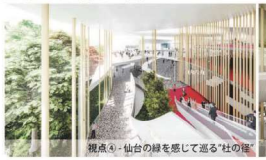
視点③「響き合う多様な広場と明快な四つの流れ」

視点②「幾重にも重なる場の中心に位置する大ホール」

①建築空間の魅力と総合デザイン

"音楽の揺らぎ"や"自然の揺らぎ"で流れた「響きの杜」

木立ちのヴェールによる適度に閉じながら開かれた空間、そり屋根からは木漏れ日のような自然光がふりそそぎ自然の揺らぎであふれた空間をつくります。地形に沿った微地形を感じながら建築空間を巡ることができる体験はまるで杜の中を歩いているような経験となります。


視点④ - 仙台の緑を感じて巡る"杜の径"

視点⑤ - 多様な人々の活動を立体的に感じる"響きの道"

自然の光を感じる大ホール / 外に開いていく多様な使い方ができる小ホール

大ホールや小ホールは自然の光を感じつつ音楽や演劇を体感でき親しみの持てる空間です。大ホールは浮遊感のある客席が空間に動きをつくります。小ホールは1階はスタンダードな使い方を想定し、上階は外部に対して開いていく今までにないタイプの小ホールを提案します。

視点⑥ - 自然の光を感じる包まれ感のある大ホール

視点⑦ - 上部は外に開いていく小ホール

②青葉山エリアの中での景観的位置づけ、果たすべき役割等

四周が緑に囲まれることにより、青葉山に新たな杜の景観を作る

駐車場により北西からの景観は樹木がなく、連続した景観が途切れています。地下に駐車場をまとめることでグランドレベルはできるだけ新たに高木で緑化することで広場化し、広瀬川の橋からは建築を隠すことが可能な計画とします。かつての大手門通りの賑わいを復活すべく、賑わい憩いの通りの景観を実現します。

視点⑧ - 桜の小径のエントランスを望む

視点⑨ - 大手門通りからのファサードを望む

③立ち寄りやすく多様な時間を過ごす人々が共存する空間づくり

にぎわいを引き込む二つのエントランス広場

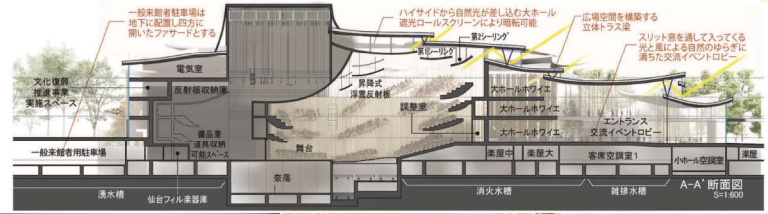
国際センター駅に直結する南側は2階から直接アクセスできるデッキをまわし訪れる人々を引き込む空間とします。また、大手門通り側からアクセスする北側のエントランスには大型バスのロータリーを設け交通の接点ともなるひろばを設けることで、誰もが立ち寄りやすい場所とします。

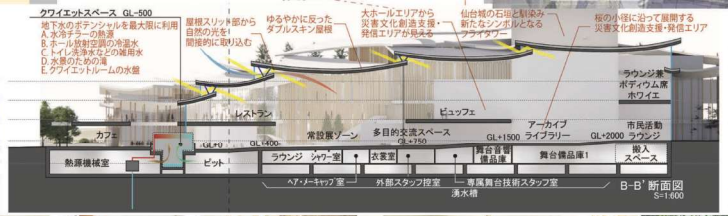
視点⑩ - 国際センター駅からエントランスを望む

視点⑪ - 大手門通りから北エントランスを望む

④施設計画・動線の合理的解決と実現性

震災の記憶と音楽の経験が重なり合いながら建物内部をループ状につなぐ





視点⑫ - クワイエットスペース

視点⑬ - 常設展ゾーン

視点⑭ - 多目的交流スペース

視点⑮ - アーカイブライブラリー

視点⑯ - ゲートウェイスペース

視点⑰ - 市民プロジェクトルーム

視点⑱ - 北エントランスロビー

視点⑲ - レストラン